

Title	教育現場とのコラボレーション: 醍醐西小学校における取り組み
Author(s)	羽山, 裕子
Citation	子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして (2012), 活動報告書(2007-2011年度): 86-87
Issue Date	2012-03-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/179718
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

醍醐西小学校における取り組み

1. はじめに

2007年度に始まった醍醐西小学校と教育実践コラボレーション・センターのかかわりは、今年で4年目に入った。当初より、研究授業と事後の研究協議会への参加を軸にかかわりが築かれ、現在まで継続されている。また、校長、教頭、研究主任の先生による講演や、センターの教員による講演といった形での交流も、積極的に行われてきた。

醍醐西小学校とのかかわりは、コラボレーション・センターの一つのユニットにとどまるものではない。センターに関係する教員、院生の幅広い専門性を生かすような、分野を超えた共同研究を特徴としている。関わる研究者、院生の専門分野の多彩さは、コラボレーション・センターの他のフィールドと比べても群を抜いていると言えるだろう。

2. 2010年度の活動概要

〈醍醐西小学校の研究方針〉

醍醐西小学校では、国語科に力を入れた取り組みが行われている。これは、国語科を通してコミュニケーションの力を付けることが、他の教科の学習にもつながると考えられているからである。研究主題は、「ことばから想像を広げ、自分のおもいや考えをすじ道立てて話したり、書いたりできる子どもの育成」と設定されている。ここから具体的には、「ことばを読む力」「すじ道立てて話す力」「自分の意見と比べながら聞く力」の育成が目指される。

このような力を育てるための具体的な取り組みとしては、①確かな学びと確かな学力をつけるための授業力の構築、②総合育成支援教育のユニバーサル化を目指した授業作り、③語彙を増やすための日常の言語活動の充実が行われている。①においては、子どもや教材の深い理解、また発問やワークシートの工夫に取り組まれている。②においては、焦点化児童を定め、その児童に行き届いた指導や支援を行うことで、クラス全ての児童に支援や指導が行き届くよう目指されている。③においては、朝の会での読み聞かせや言葉遊びを始めとして、言語と触れ合う機会が授業外でも豊富に設けられている。

〈センター側の活動体制〉

2010年度は、趙卿我助教、吉田正純助教が中心となって醍醐西小学校とかかわってきた。また公開授業研究会には、学校現場と関わる熱意を持つ院生、特に国語科に関心を持つ院生も複数名参加させていただいた。

参加する院生の幅が広がったことは、今年度の特徴と言えるだろう。醍醐西小学校とコラボレーション・センターの取り組みは、フィールド研究を主としな

研究室の院生にも認知されてきている。たとえば、2011年1月21日の研究発表会には、2009年度より関わりの深かった教育方法学、生涯教育学の分野を超えて、認知心理学を専門とする院生も参加し授業を見学した。

学校現場と関わる機会の少ない院生にとって、醍醐西小学校での経験は非常に貴重な学びの場を提供してくれるものである。また、関わる院生の幅の広がりにはセンターと現場の双方に利益をもたらし得る。センター側の参加者にとって、自分とは異なる分野の者と意見の交流を行うことは、自らの視点の偏りを反省する機会となる。また、幅広い学問分野からの質問や指摘は、現場で指導を行う先生方にも、新鮮な刺激として受け止めていただけるのではないだろうか。このような多様な研究者、院生の参加が今後も望まれる。

3. かかわりの具体像

〈授業とかかわるために〉

授業を見学させていただく際には、事前に院生間で自主的な勉強会が行われた。勉強会は、小学校からいただいた指導案を読みあわせることに始まり、そこから教材研究へと進んだ。たとえば1年生「おおきなかぶ」の単元については、複数の教科書を比較したり、文献を調べて過去の教材研究の蓄積から学んだりということが行われた。比較の結果、教科書会社によって異なる翻訳を採用しており、同じ場面であっても描写の順序に違いがあることなどが指摘された。そして、そのような違いが児童の理解に与える影響が話し合われた。



▶東京書籍『あたらしいこご一年上』おおきなかぶ、pp. 70-71

このような取り組みは、今年度は同じ分野の院生同士で行われるにとどまった。次年度以降は、同じ授業を見学する院生同士が分野の垣根を越えて教材研究を行うことにも、取り組まれるべきであろう。



▶光村図書『こくご一上かざぐるま』おおきなかぶ、pp. 78-79

〈授業の様子から〉

ここでは2011年1月21日（金）に行われた国語科自主研究発表会における、育成学級の取り組みを紹介する。同発表会には、他県からの参加者に加え、伏見区の他の小学校から多数の教師が参加し、事後の研究協議会で活発な議論が交わされた。

醍醐西小学校には二年級の育成学級があり、合わせて5人の児童が在籍している。5人の児童の在籍学年は1年生から6年生まで幅広く、課題とする分野も多様である。このような学級の特徴からは、全員が同じ学習に協力して取り組むことは、一見困難であるように見える。しかし、醍醐西小学校の育成学級では、集団で学習に取り組むことの重要性に目を向け、教科や学習内容に応じて、二クラス合同や、学年別、男女別にするなど編成に柔軟性を持たせて指導を行っている。授業研究会においては、両学級の担任が、個々の児童の特性と単元の性格とを見合わせて、ティームティーチングによる二学級合同授業に取り組んでいた。

本時は、単元「使えることば、文をふやそう」の第7時であった。子どもたちは前時まで、ことばカードを並べて絵の内容を描写する活動や、ことばカードに自分の言葉を加えて表現する活動などに取り組んできている。それらをふまえて本時では、絵の内容を描写するために、自分たちで適切な表現を考え、文章化していく活動が行われた。なお育成学級では一分間スピーチの取り組みも大切にされており、本時でも、後半はスピーチ活動が行われた。

活動に取り組む前に、まず目標の確認が行われた。各児童が自分の目標を発表し、教師がそれをホワイトボードに書き取って教室の前面に掲示した。その後、児童は二つのグループに分かれ、与えられた絵を描写するために、ことばを出し合って文章を組み立てる活動を行った。絵に描かれている場面は、跳び箱や粘土遊びなど児童が最近取り組んだ活動であり、実感を持って言語表現を行えるよう工夫されていた。児童たちは、事前に出しあった目標を達成するため意欲的に取り組んでいた。また、グループ内では教師の支援を受けつつ互いにアドバイスする姿も見られた。授業の後半では、一分間スピーチが行われた。スピーチでは、友達と遊んだことや体育の授業での出来事など、各自の興味関心に応じた内容が話された。話し手の児童に

対して聞き手の児童から、「何というゲームをしましたか」「なぜ楽しかったのですか」など多くの質問が出された。質問は「なぜ～」と理由を問うものが多く、単語ではなく文章で答える必要があったが、どの児童も「…だからです」と適切な答えを返すことができていた。このように授業全体を通して、書くこと、話すこと両方の形で、ことばを使いこなす力が養われていた。

事後の研究協議会においては、院生や学外の参加者から質問や感想が出され、言葉を育む質の高い授業であると評価された。さらに、参加者の中には他校の育成学級担当者が多数おり、積極的な意見や提案がなされた。提案は、各学校の育成学級で日々行われている実践に裏付けられたものであり、児童数やリソースといった実際の面も加味した真剣な議論が交わされた。このような学校間・教師間での学び合いの具体に触れたことは、貴重な勉強の機会となった。また協議会の参加者にはポストイットが配布され、授業と協議会全体を通しての感想・提案を記入して授業者に渡すことができた。このように参加者から授業者へのフィードバックの場が確保されていることは、重要なことであると言える。今後のかかわりにおいても、このような場を生かしつつ、参加する研究者、院生と授業者のコミュニケーションを図りたい。

4. 今後の課題

醍醐西小学校は研究目標を明確に設定し、各授業において工夫を凝らした取り組みを進めている。また、授業外においても、朝の会などを活用して言語活動の充実を図っている。この目標や取り組みは、同校の児童の実態に裏付けられている。そのため、醍醐西小学校の実践をより良く理解するためには、見学する単元や教材に関して学び合うだけではなく、醍醐西小学校の方針や児童の実態について十分に理解した上でかかわることが今後とも重要である。今年度、院生間で自主的に見られた事前勉強会を、以上のような点を考慮してさらに発展させていくことが求められる。

醍醐西小学校とのかかわりにおいては、小学校における授業のあり方、学校のあり方を共に考えることを通して、フィールドから学ぶ力を磨く機会をいただいている。今年度は、事前の教材研究など、参加者自身の学びを深めるための主体的な取り組みが見られた。今後は、深めた学びをどのように有益なフィードバックにつなげるべきかを検討していく必要がある。小学校現場にかかわる貴重な機会に恵まれたことを生かし、より一層学びを深めて、その成果を学校現場に還元できるよう、一人ひとりが自覚を持って活動していくことが求められる。

来年度は、醍醐西小学校とのかかわりが5年目となる節目の年である。過去の蓄積を見返しつつ、両者のより良いコラボレーションの形を探っていきたい。

（文責：羽山 裕子）